

相馬銀行不正事件

愈々暴露する 背任横領の事實 充分の證據も擧げらる

中村町相馬銀行の不正事件は、慶善銀行代表は同晩餐會後預金協
慶新聞紙上に報導されてきたが、定利率の改訂に關し種々協議す
過般來窪田

盧立兩檢 事が相馬銀行の不正事件は、慶善銀行代表は同晩餐會後預金協
慶新聞紙上に報導されてきたが、定利率の改訂に關し種々協議す
過般來窪田

同行整理委員から飯野村和田龍 下り下り
太郎氏に對して任意に債務を履 行した責任が中心であるもの、
如くすに

相當證據 をあげられた 利率の引下に就ては大體意見の
一致を見たが問題は、その程度
模倣である、而して同行休業閉
鎖當時にさかのぼり不正事實の
暴露を見たらしく中村警察署の
盆子刑事はこの程上京當時の東
京支店長部長之氏を引致歸署日
下相馬銀行に於て取調中であ
るから意外の新聞實も暴露され
る模様である。

預金利率 引下協定
普通銀行の預金協定利率引下問
題の擡頭に鑑み貯蓄銀行でも之
に追従して協定利率を

平町下水改修 工費一萬圓
平町では本年度に豫算一萬二千
二百圓を計上する下水改修工
が、過般丸の内銀行集會所に貯
蓄銀行定例晩餐會を開き、中村
町を四尺六寸のコンクリート
(東京貯蓄)本庄(東京貯蓄)伊藤
(川崎貯蓄)林(安田貯蓄)の四貯
の七月初起工する事となつた

磐城信用録 好評湧く
熱狂的歡迎を受ける
東北實業新聞社長吉村白水氏の
計畫に懸る磐城信用録は一般社
會から頗る好評を受け濱三郎に
亘つて申込者多數あつて該信用
録の体裁も四六判洋紙約八百頁
表紙はクロス製金文字入天金
付で頗る美本である。

銀行預金よりも 電氣株を
殖産貯蓄として安心
近頃小玉川電氣株式會社の株公
募が發表される等、同社では目
下準備中であるが、某消息通は
語る。

新聞の新聞 (三十七)
磐城民政新聞の金子君、僕等
は嘗て磐城に反省をもとむる
爲めに手きびしい批判を加へ
た事があつたが、磐城が今日
の状態を見るに至つた處へ、
批判がましき筆誅を加へる事
は死屍に鞭打つもの、此の
際僕等は勇ましく弱きものを
助けてやる歩調に出ようでは
ないかの意見に對しては何ん
も異議の無かつた事もある。

祝石城の經濟號
鈴木辰三郎
野崎滿藏
戸田雄章
四倉銀行
鷺清昇
四倉電氣株式會社
社長 新妻盛
金成通
古川傳一
七十銀行平支店
支配人 山田勇太郎
副支配人 三浦幸哉

祝石城の經濟號
鈴木辰三郎
野崎滿藏
戸田雄章
四倉銀行
鷺清昇
四倉電氣株式會社
社長 新妻盛
金成通
古川傳一
七十銀行平支店
支配人 山田勇太郎
副支配人 三浦幸哉

祝石城の經濟號
鈴木辰三郎
野崎滿藏
戸田雄章
四倉銀行
鷺清昇
四倉電氣株式會社
社長 新妻盛
金成通
古川傳一
七十銀行平支店
支配人 山田勇太郎
副支配人 三浦幸哉

祝石城の經濟號
鈴木辰三郎
野崎滿藏
戸田雄章
四倉銀行
鷺清昇
四倉電氣株式會社
社長 新妻盛
金成通
古川傳一
七十銀行平支店
支配人 山田勇太郎
副支配人 三浦幸哉

祝石城の經濟號
鈴木辰三郎
野崎滿藏
戸田雄章
四倉銀行
鷺清昇
四倉電氣株式會社
社長 新妻盛
金成通
古川傳一
七十銀行平支店
支配人 山田勇太郎
副支配人 三浦幸哉

祝石城の經濟號
鈴木辰三郎
野崎滿藏
戸田雄章
四倉銀行
鷺清昇
四倉電氣株式會社
社長 新妻盛
金成通
古川傳一
七十銀行平支店
支配人 山田勇太郎
副支配人 三浦幸哉

祝石城の經濟號
鈴木辰三郎
野崎滿藏
戸田雄章
四倉銀行
鷺清昇
四倉電氣株式會社
社長 新妻盛
金成通
古川傳一
七十銀行平支店
支配人 山田勇太郎
副支配人 三浦幸哉

それは顧客の推奨する
異口同音の絶叫!!

五加納活版所

資本金七十萬圓で
創立後は平電合併
諸工費極めて安賈

早くも有望視される
小玉川水電會社
期待されつつ準備を急ぐ

事業(鐵管、發電機等)は約二
割位で普通は水路貳千間を設備
して、落差が貳百尺乃至參百尺
を利用するを得て非常な有望な
事業とされてきた、故に水路

であつた、平電株式會社が
大瀧發電所設置反對が無くこ
の時分は、そんな有望な會社であ
つたかと思ふ、栗原君は目下
平電株式會社の取締役として

町屋 409.502
平電

磐陽業界の權威

それは顧客の推奨する
異口同音の絶叫!!

五加納活版所

町屋 409.502
平電

副支配人 三浦幸哉

早くも有望視される

小玉川水電會社

期待されつつ準備を急ぐ

發表前既に株の申込がある

本邦に幾千幾萬の電氣會社の存に依りて出願した赤井村小玉川立を見るが、皆で破綻失敗を來水電が来る五月十八日許可されし事を聴かぬ程左様に

電氣事業

は有利であり社を設立する目下其の準備を急いでゐるが、目下發起人間に

より重要視されるも亦決して故郷募集に着手する筈であるとなしとしない、本邦内には比較

小田炭礦

磐城炭礦等に

發達を見るやうになつたが、本邦でも電力供給の契約はほとんど郡出身者にして電氣事業を經營

出願人總

代平電氣株式

會社事務馬目雄次郎氏と共に高があるといふから愈々發表した岡唯一郎、木村清治、佐藤庄太郎には日ならずして満株となる

湯水時が少く

工事費が安價に出来る

電力需用者は安全に使用される

今回計劃した小玉川水電は電氣又晴天が続いても其減水する事業中特に

群を抜き

んで有望な

もので、赤井村及永戸村を貫流電計劃が永年の間此の地方を識して居る小玉川の上流地方(田の電氣事業者の

美望的

となつてゐた

非常に繁茂し國有林、國有保安の無理はなかつた、尙該發電林等は立木の儘樹ち腐つて居る所は特に安價に出来る事であつ

送電費が安價に出来る

事務員、電工等多数の人員を要

ら續いても甚しく出水の憂もな工事費の約八割を占め其他の工

資本金七十萬圓で

創立後は平電合併

諸工費極めて安價

一株金五

拾圓券一萬四

千株とし第一回拂込金一株につき拾圓五拾圓、合計金拾七

小玉川第一

(下流)發電

株式會社は現在資本金六拾萬圓諸經費及水利權一切で金拾萬圓

馬目雄次郎氏

推賞して語る

況時でさいも拂込の二倍以上にせり上げられて他の電氣事

諸橋元三郎

諸橋守次

業より屢々譲渡を迫られた爲め東京側株主との協同關係

小田炭礦株式會社

社長 萩原申八

社長の手によりて四倉電氣會社や平電氣株式會社を創立した

であつた、平電氣株式會社は

大瀧發電所設置反對が無くこ

の發電を開始してゐたなら今

時分はどんな有望な會社であ

つたかと思ふ、栗原君は目下

平電氣株式會社の取締役支配

人で働いて居るが非常に仕事

すきで暗いから暗いまで働く

といふ努力家であるから平電

氣株式會社の株式を多く持つ

て居る小玉川水電會社も亦同

様の關係であるから此の會社

の株式も大變な價格を爲す様

になる事と信する、同君の事

を兎角言ふ者もあるが夫れは

同君は超越して他人を侵さず

又已れを守るに頑健で何事も

理性的だからで、同君の爲め

に損をしたり、馬鹿にされた

り、栗原君が經營の任に當る

小玉川水電會社は前途益々有

望なるものがあると思ふので

同君が是れまで創立並に經營

して來た事業の一端を紹介し

て本事業の將來を豫斷する資

料の一として栗原君の手腕と

性格とを申上げた次第です

祝石城の經濟號

東部電氣株式會社

平營業所

所長 武田精一

諸橋守次

諸橋元三郎

小田炭礦株式會社

社長 萩原申八

石城郡銀行組合

小名濱大數網事務所

郡司二郎

●良品廉賣に勝る商略なし!!!

磐城セメント會社特約店

和洋銅鐵 釜屋商店

磐城平 電話(九三九番)

●實敏捷は(久)の生命なり!!!

平町字田町(電話五二三番)

高久病院

院長 醫學士 高久忠
副院長 新潟醫學士 赤羽清
藥局長 藥劑士 佐竹菊雄

●第二病室増設—入院隨時

内科 小兒科 (入院應需)

花柳病科 藤沼醫院

平町紺屋町 電話 平四〇七番

平町搔搔小路

山野邊義政法律事務所

電話 六二五番

漆器の御用なら

和久井屋漆器店

平町一丁目(電話四〇五番)

のんで直ぐ効く 散 定價(二十錢・三十錢・五十錢・一圓)

一、本劑は神經系の鎮痛強壯内服藥として藥化學的に成功せる新劑なり
一、故に頭痛、頭痛、神經痛、リウマチ等、の神經系の諸症、偉大なる効を奏す、直ちに試みよ
一、善は急げ、試験はタツタ五分間
一、當地方信用ある各藥局各藥店に特約販賣せり

特約店 平町五丁目角 山野邊藥局

御知らせ

今般業務擴張之爲め左記へ事務所
移轉仕候 右御知らせまで
六月十六日

平町舊城跡四番地(管林署東向と)

福島縣石城養蠶獎勵會

月刊東北農蠶之研究編輯局

木田藤次郎

祝石城の經濟號

植田町

片岡醫院

院主 片岡章

加藤丈夫

金成金三

山崎登

入山探炭株式會社

入山坑務所

湯本信用無盡株式會社

古河鑛業株式會社

好間鑛業所

小名濱町役場

町長 鈴木榮

助役 高木保

吉田正雄

四倉如來寺

小松學俊

所 務 事 網 敷 大 間 豊

郎 次 彦 藤 遠 門 衛 左 與 井 酒 郎 太 治 藤 遠

買ひ良い藥店

山野

邊藥局

平町五丁目 山野邊東次郎

祝石城の經濟號

はなかつた、其後當事者は極力、磐城の基礎を確立すべく努力したことは事實であつた、磐城が、今日休業を見るに至つた事は、磐城當事者の責任である。

發行日五日、廿日(二回)
印刷人 鈴木昌雄
發行人 鈴木昌雄
福島縣石城郡平町
材木町廿二番地